

体験から育つ、防災と地域の仲間づくり

— 防災を親子で学び、交流を広げるために

課題、及び、
目指すところ

- 自治会は約500世帯・36班で構成され、加入率の低下や担い手不足が課題
- 若年層の参加促進と防災力向上を両立する伴走支援を目指す

法泉境木自治会では、防災の取り組みを通じて地域のつながりを深め、将来の担い手づくりにつなげる活動が行われました。自治会では約500世帯が暮らしていますが、加入率の低下や担い手不足といった課題もあり、若い世代の参加をどう広げていくかが大きなテーマとなっています。

その一歩として、防災アドバイザー植田このみさんの協力のもと、体験型の防災イベントを開催しました。イベントでは、簡易トイレの体験や暗闇での明かりの見え方を確認する体験など、実際に体を動かしながら学ぶ企画が行われました。参加者からは「体験型で分かりやすい」「親子で学べる」「防災訓練でもやってみたい」といった声が寄せられ、楽しく学びながら地域の交流が生まれる時間

となりました。
また、実際に簡易トイレを使ってみることで、備蓄品の使い方や課題にも気づくことができました。災害時に役立つ知識は、実際に体験してみることにより理解が深まることを改めて実感する機会となりました。

取り組みの振り返りでは、体験型の防災学習や親子で参加できるイベントは今後も継続したいという声が多く上がりました。一方で、告知期間の不足や新しい参加者の少なさといった課題も共有され、より多くの住民に参加してもらうための工夫が必要であることが確認されました。

今後は、今回の経験を生かし、夏祭りや連動した防災企画なども検討されています。毎年実施してい

るスタンプラリーに凝固剤を使用した簡易トイレ体験を追加するなど、楽しみながら学べる企画に加え、子どもが地域に防災を伝える「子ども防災インストラクター」の育成なども話題に上がりました。防災をきっかけに、子どもや若い世代も地域活動に関わるきっかけづくりが期待されています。

防災は「もしもの備え」であると同時に、地域の仲間づくりの機会でもあります。法泉境木自治会の取り組みは、防災を通じて地域のつながりを育てていく新しい一歩となりました。



防災インストラクター
植田このみさんによる説明



ペットボトルで
明かりを増幅する体験



段ボールの簡易トイレで
災害時のトイレ体験



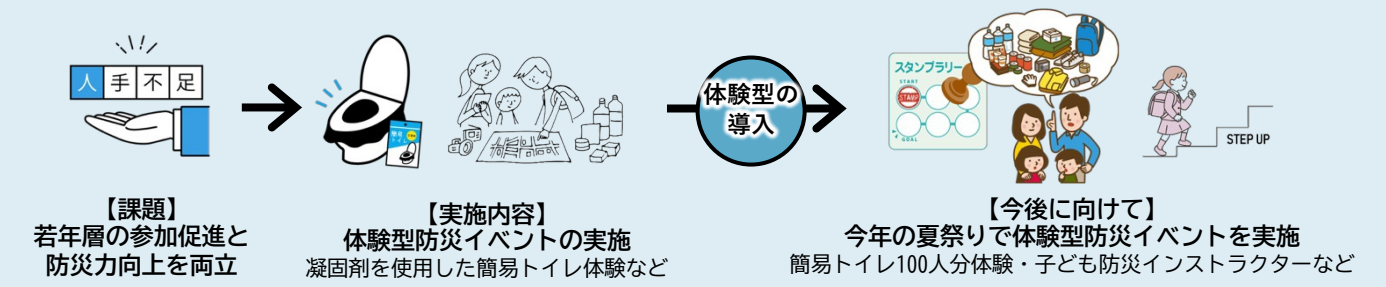
凝固剤で紙粘土で作った大便と
水を凝める体験

参加者の声

簡易トイレの体験など、実際にやってみることで初めて分かることが多くありました。親子で参加できたことで家庭でも防災の話題が広がり、とても良い機会になりました。楽しみながら学べる内容だったため、これまで防災にあまり関心がなかった方にも参加してもらえる可能性を感じました。

防災をテーマにした課題解決に向けたステップ

若い世代の参加促進と防災力向上の両立を課題に、体験型防災イベントを実施しました。凝固剤を使用した簡易トイレ体験などを通じて理解を深め、今後は夏祭りや連動した企画や子ども防災インストラクターの育成へとつなげる予定です。



今回ご協力いただいたアドバイザー

防災アドバイザー
植田このみさん



2007年より防災インストラクター（川崎市認定）、防災士として行政・地域団体・企業と連携し、「すぐ取り組める身近な防災」をテーマに防災・減災講座や研修等を行っている。

自分たちの自治会でも実践してみませんか？

具体的な取り組みやアイデアの一例

【子ども防災インストラクターの育成】
防災イベントで学んだ子どもが、家族や地域の方に防災の内容を伝える「子ども防災インストラクター」の育成を進めていくアイデア。教わるだけでなく、伝える役割を持つことで子どもたちの意欲が高まり、家庭でも防災の話題が広がるはず。地域全体で防災を考えるきっかけづくりになることを期待します。



自分たちの自治会町内会で導入する際のチェックリスト

- ☐ 【学びのあり方】「聞くだけの防災」を「やってみる防災」に変えるには、どんな工夫ができるでしょうか？
- ☐ 【参加の広げ方】子どもや親子が参加したくなるには、どのような内容や雰囲気が必要でしょうか？
- ☐ 【継続の工夫】一度の取り組みを次につなげるために、どんな仕掛けが考えられるでしょうか？
- ☐ 【広がり】学んだことが家庭や地域に自然に広がるには、どんな関わり方がよいでしょうか？
- ☐ 【地域との結びつき】地域行事と防災を組み合わせるとしたら、どんな形が考えられるでしょうか？